

子どもたちは夏休みに入った。保護者も教師も、「生活リズムは崩れないか。」「家庭学習は毎日してくれるだろうか。」と長期休業中の子どもたちの生活には神経を使う。

本校においても、学習習慣が身に付いている子どもたちはそんなに多くない。チャレンジ目標の一つに「机について、家庭学習をする。

(10 分間×学年)」を設定しているが、よくあてはまると答えた子どもは、32%, 少しあてはまると答えた子どもが34%と、昨年度の結果は散々であった。

昨年度の県内学力検査では、これまでの学力と家庭学習の時間の関係を研究した結果からも、2時間～2時間30分の学習時間の子どもが高い得点を得ていることが分かっている。もちろん、これはよい学習習慣と学習法を身に付けていることが前提である。また、行動心理学や認知心理学の研究から、「学習の習慣や態度は、小学校の低学年に既に作られ、その後は特別指導がなければ、進歩しない。(カッフ)」と言われている。

そこで、学習習慣づくりに向けた取組の基本を提案したい。子どもの学習習慣の形成には、家庭環境や生活リズムなどの生活習慣と学校における人間関係や集団生活への適応などの社会的なかわりが重要になってくる。つまり、学習習慣づくりに、基本的な生活習慣と社会的な生活習慣の3つの習慣形成を総合的かつ一体的にとらえていかなければ、効果は一時的なものになろう。これまでも、毎日宿題と称し、漢字や計算をさせることがあったが、なかなか全員の学習習慣までに至らなかった。

3つの習慣形成を総合的かつ一体的にとらえるためには、まず、学級の存在・仲間と学ぶ意味を教師が明確にし、日々の授業のあり方と宿題の結びつきを考え直すことが重要になる。学習仲間と学び合う楽しさやよさをたっぷり味わわせ、家庭での学習が毎日の学校での学習に役立つという感覚も欲しい。しかし、一番大切なのはこのような考え方を自校の保護者が理解してくれるかである。

(芝)

チャレンジ目標

平成14年から、子どもたちが取り組み、成果が評価できる目標を県内公立学校全てに、設定することが依頼されている。

学に宿題を出して
学習習慣は身に付かない

小学校1・2年生は繰り返しを好み、宿題も反復練習を課しやすいが、3年以上に求めても、忘れることが多くなる。

宿題を出す前提

- ・子どもは、家庭環境や育ちにより、ものの考え方や感じ取り方が違うので、学習活動の目的を明確しておくこと。
- ・宿題の量や内容の配慮

学習習慣の三位一体

